

# 英語教育におけるこれからの文法指導のあり方

大竹 芳夫 言語教育講座

## 1. はじめに

文部科学省は英語教師の英語力の目標を英検準1級、TOEFL550点、TOEIC730点に設定している。英語教師がこうした試験で高得点をあげるに越したことはないが、様々なレベルの学習者に英語を教えるという責務がある以上、英語の本質を深いレベルで理解したうえで英語に対する学習者の興味や関心を喚起できる英語力を涵養しなければならない。学習者の実践的コミュニケーション能力を伸長するために、まずは教師自身が場面や文脈に応じて適切な英語表現を選択できること、さらにはその表現がなぜ適切なのかを理解できなくてはならない。また、学習者の英語に対する関心や興味を喚起するという使命を果たすためには、教師自身が英語母語話者の生き生きとした英語感覚を理解したうえで、学習者に常に良質の刺激を与える必要がある。大竹(2000)や Otake (2001)では最近の言語学の成果の英語教育への活用可能性を考察した。本研究では、これらの研究では詳しく論じることができなかった点も含めて、中学校や高等学校における英語教育において指導されるべきポイントのいくつかを取り上げながら、最近の言語学研究成果と関連付けて論ずる。

## 2. 新しい視点からの文法指導

本節では、従来は個別的に提示されてきた文法事項を統一的視点から指導することの大切さを考察する。「木を見て森を見ず」と言われるように、学習者にとって個々の文法事項を全体的な見地からとらえ直す学習段階が必要である。まず、英語の動詞の過去形について考えよう。動詞の過去形は真っ直ぐ過去を示すこともあれば、仮定法を合図することもある。時には過去形が丁寧さを表す場合もある。

- (1) I walked to school yesterday.
- (2) If he finished his homework, he would go.
- (3) Did you want some more coffee?

(1)は過去の出来事を表す過去形、(2)は仮定法過去の過去形、(3)は丁寧さを表す過去形と呼ばれるものである。従来の英語教育においてはこうした文法事項は学習段階に応じて個別的に提示されるにとどまり、これらを統一的にとらえるという指導や配慮は疎かにされてきたように思われる。しかし、最近の研究ではこうした一見ばらばらに見える言語現象について統一的な視点での文法説明を試みている。たとえば、Swan (1995)は distancing(「距離感を出すこと」という見出し項のもとで、過去形についても現実からの距離感を出す手段として取り上げている。次の例を考えよう。

- (4) How much did you want to spend, sir? (*meaning* 'How much do you want to spend?')  
(Swan (1995))

(4)は「おいくらお使いになりたいですか?」といった意味である。このような過去形は相手の過去の気持ちを聞いているのではなく実際には現在の気持ちを丁寧に、間接的に尋ねている。Swan (1995)は過去形がこのように丁寧さを表現しうるのは、過去形が現実からの距離感、遠さ、間接性を表すからであると説明する。日本人英語学習者にとって、現在のことやこれからのことを表現するのにもかかわらず過去時制を用いる点は容易には理解しがたいところであろう。しかし、日本語では「お・」 「ご・」といった接頭辞や語形変化などの文法的手段によって尊敬や丁寧の気持ちが表現されるが、英語には敬語表現が文法の中に組み込まれてはいない点に注意すべきであろう。そのため現実からの遠さ、心理的距離感、控え目、謙虚さ、丁寧さの表出は英語においては時制という時間的距離感を表す形式に基づいて行われることがある。ただし、英語には動詞の変化形によって表現される未来時制はない。したがって現実からの距離は現在時を表す動詞の現在形ではなく過去形を用いることによって表現される。

学習段階に応じて過去形の個々の用法を提示することが重要であることは疑う余地もないが、過去形の個別的な用法を過去形の意味の本質と結びつけて学習者に理解させるという教育的配慮も必要となろう。Larsen-Freeman (2003)は間接性や距離感が丁寧さを表出することを学習者に認識させる重要性を主張する。その主張の根底には、文法を個別に見るのではなく、大局的な見地から眺めることで、文法を統一的に学習者が理解できるということがある。ここで、実際に収集した言語資料を観察しておこう。次例は“Did you want some coffee?”の実際の使用例である。相手の現在の気持ちを直接に尋ねるのではなく、動詞を過去時制に変えることで現実からの距離感を表出して丁寧さを表現している。

- (5) Hello. Come on in. I'm Chester Cone. This is my office. Thanks for coming in. Did you want some coffee? Do you? I just made a fresh pot. (*LA Weekly*)

「距離感」が丁寧さの表出に寄与するというこうした英語の文法特性は、日本語にも相通ずるところがある。たとえば、「遠慮」、「遠回し」、「婉曲」といった日本語からも推察できるように、丁寧さを表すために表現形式を直接的ではなく間接的に変える技法が日本語にも存在する。このような英語の過去時制の用法は、従来は仮定法過去として学習者に提示されてきた。しかし、英語母語話者の直感に迫るこうした説明は、ある程度の文法に習熟した学習者には十分に納得できるものと思われる。また、一般性の高い原則を学習者に提示することで断片的な文法知識を系統的に理解させることも可能となる。

さて、Swan (1995)は distancing(「距離感を出すこと」という文法概念のもとで、過去形のみならずさまざまな文法現象を統一的に学習者に提示している。ではそのいくつかを見ておこう。第一に、相手に Yes/No で答えられるような選択肢を与える形式を用いることで依頼文をより間接的に丁寧にすることができる」と Swan (1995)は指摘する。

- (6) Could you tell me the time, please? (*much more polite than Please tell me the time.*)

Yes/No の選択の余地を相手に与えるということは、相手の意思を尊重していることになる

ため丁寧さの度合いが増すことになる。第二に、進行形は表現を和らげる感じを出す。

- (7) I'm hoping you can lend me £ 10. (*less definite than I hope ...*)

進行形は一時性、未完了を表すことから、主語の指示対象の内心がまだ定まっていないことを相手に伝えることになる。つまり、相手の反応次第ではまだ修正する可能性を表現しているという点で、相手の意見を考慮している。次のように過去形と進行形を併せるとさらに現実からの距離感や未完了性が表出されることになる。(8)の表現は店員が客に対して用いて「特に何かお探しの品がございますでしょうか?」といった意味になる。

- (8) Were you looking for anything special? (in a shop)

この他にも Swan (1995)は will を用いたり(=(9))、条件や否定を用いる(=(10)-(11))と距離感が出るし、quite や kind of といった表現を用いる(=(12))と語調が弱まるという例にも言及している。

- (9) I'll have to ask you to wait a minute.  
 (10) I wonder if you could lend me £ 5?  
 (11) I don't suppose you want to buy a car, do you?  
 (12) I'd quite like to sort of start thinking about going, so to speak.

また、Swan (1995)は個人的な断定である感じを和らげるために、I や we の代わりに one が用いられると指摘する。

- (13) 'Hello, Charles, How's it going?' 'Oh, one can't complain.'

ここまで考察してきたように、各文法事項を個別的に学習者に提示するにとどまらず有機的に関連づけて把握し直す機会を与える工夫が必要であろう。英語の文法を学習者に適切に理解させることの大切さは次のような(14a-b)の関連性についても当てはまるであろう。

- (14) a. a friend in the U.S. (アメリカの友人)  
 b. a friend who lives in the U.S. (アメリカに住んでいる友人)

(14a)は中学校 1 年次に指導する前置詞を含む表現、(14b)は中学校 3 年次に指導する関係節を含む表現である。英語の関係節は先行詞を後方から修飾するという日本語との構造の相違ゆえに中学生にとって理解しがたい文法事項となっている。(14b)のような関係節を学習者に指導する際には、(14a)のような前置詞句もやはり同様に主要部を後方から修飾するという既習文法事項との形式の共通性に立ち戻る配慮をしたい。そうした指導により、学習者は断片的な文法知識を一般性の高い原則に基づいて系統的に理解することができると考えられる。

次に英語の指示詞の指導上の留意点について考えよう。Larsen-Freeman (2003)は次のよ

うな例を挙げながら指示詞の誤用について言及している。

- (15) Teacher: What is this?  
Student: It's a book. (NOT: This is a book.)

Larsen-Freeman (2003)が(15)で指摘するエラーは日本人英語学習者にとっても誤りやすいエラーであるように思われる。なぜなら、日本語での指示は(16)に示すように場面指示が優先されて場面に登場する事物との距離に応じた指示詞が選択されるが、英語での指示は文脈指示が優先されるからである。

- (16) 先生：あれは何ですか？  
生徒：{あれは/\*それは/\*これは}地図です。  
cf. Teacher: What is that?  
Student: {It / \*That / \*This} is a map.

指示詞を指導する際には、人間のもつなわ張り意識と関連付けて学習者の興味をひきつけたい。神尾 (1990)が論ずるように、高等生物である人間にはなわ張り意識があり、キツツキのドラミング、オオカミのハウディンク（遠吠え）と同様に人間の言語表現にもなわ張り意識が表出される。また、英語の *this*、*that* と日本語の「これ、それ、あれ」の対応関係は日本人英語学習者の文法意識を高揚させる好機であると考えられる。英語の *this* は話し手のなわ張りの中のものを指示する。*That* は日本語のソ系のように聞き手のなわ張りの中のものを指示する場合と、ア系のように話し手・聞き手双方のなわ張りの外のを指示する場合とがある。*It* に「遠近感」は全くなく、話題となっている対象や取り巻いている状況を指すが、「それ」は聞き手のなわ張りの中のものを指す。つまり、神尾 (1990)が述べるように、指示詞に関して日本語は3項対立、英語は2項対立であるという点に学習者の関心を向けたい。

文法指導は Larsen-Freeman (2003)が主張するように、形式(form)、意味(meaning)そして使用(use)の3領域を見通す必要がある。次のような「行く、来る」と *come* と *go* の使用のズレに学習者の注意をひきつけたい。

- (17) 話し手 A (母親)： ご飯の用意ができたわよ。  
話し手 B (子供)： 今 {行く/\*来る} よ。  
(18) Speaker A: Breakfast is ready, John.  
Speaker B: I'm {coming / \*going}.

「(そちらに)これから行きます」と言うときに、英語では“I'm coming.”と言ひ、「I'm going.”と言わない。“I'm going.”と言うと、「これから外出するところなんだよ」といった違う意味になってしまう。日本語では話し手自身が動く場合、発話場所が出発点であれば「行く」、到達点であれば「来る」を用いる。話し手以外のものが動く場合、到達点側に話し手の視点があれば「来る」を用ひ、それ以外の場合は「行く」を用ひる。つまり、「行く」と「来る」の使い分けの基準は話し手の視点にある。他方、英語では、話し手の視点ばかりではなく、

聞き手の視点が到着点にある場合にも come が用いられる。こうした点を指導するのにインターネット上に公開されている映画の台詞データベースを活用するのも効果的であろう。The Internet Movie Database(<http://us.imdb.com>)にアップロードされている映画の台詞をもとにしながら、go と come の実際の使い分けを観察しよう。映画 Jaws の台詞が状況描写とともに公開されている次例を見てみよう。

(19) Tom Cassidy: Where are we going?

Christine 'Chrissie' Watkins: [*Running to water*] Swimming!

Tom Cassidy: Slow up, slow down! I'm not drunk! Slow down! Wait I'm coming! I'm coming! I'm definitely coming! Wait, slow up! I can swim - just can't walk or dress myself. [*Trips and falls on beach*]

Christine 'Chrissie' Watkins: Come on in the water! [*swims*]

Christine 'Chrissie' Watkins: Take it easy. Take it easy.

Christine 'Chrissie' Watkins: Oh! God help me! God! Argh! God help!

[*Shark starts attacking*]

Tom Cassidy: I'm coming... I'm coming. [*Goes to sleep*]

Christine 'Chrissie' Watkins: It hurts! It hurts! Oh my god! God help me!

God please help! [*Disappears underwater*] (映画 Jaws (1975)の台詞)

(19)では、Tom が Christine に Where are we going? (僕たちどこに行くの?) と尋ね、話し手 Tom と聞き手 Christine 双方のなわ張りの外に移動することを表現するため、初めは go が選択されている。ところが、Christine が海辺に駆け出して行ってしまい、彼女を追いかける Tom は、それ以降は I'm coming. (今そっちに行くよ) と聞き手である Christine のなわ張りに入ることを伝える come を用いて表現している点に注意されたい。上記の実例が端的に示すように、日本語で「行く」と表現される移動が英語では go のみに対応するのではなく、聞き手のなわ張りも考慮の対象となり come も選択されるという点に日本人学習者は留意する必要がある。こうした映画の台詞は生き生きとした状況描写が与えられており、come と go の適切な使用を学習者に教授する上で大いに活用されるべきであろう。動詞 come については、次のような言語現象にも学習者の関心を向けておきたい。日本語の「来る」が話し手のなわ張り内への移動を表現するのに対して、英語の come は話し手のなわ張り内だけではなく聞き手のなわ張り内に移動することも表現することは上で説明した。しかし、(20)のような come は話し手も聞き手もない the corner (その角) への移動であるにもかかわらず用いられている。

(20) When you come to the corner, turn left.

(20)は「その角まで行ったら、左に曲がりなさい」という道案内の場面である。筆者の大学生を対象にした調査からも明らかであるが、日本人学習者はこのような場合に go を用いて When you go to the corner...と不自然な表現をすることが極めて多い。たしかに、発話時点において相手は当該のなわ張りにいるわけではない。しかし、「左に曲がりなさい」と相手

に指示を与える際には視点を移動させて、すでにその場、つまり「その角」に相手がいるものと想定していなければならない。類例を実例で検証しよう。(21a)は「犬を食する国に行ったら、犬を食しなさい」、(21b)は「Email Server Names というホームページに行ったら、次のように入力しなさい」といった意味になるがいずれも come が使用されている。

- (21) a. "When you come to the country of the dog-eaters, eat dog."  
(*The Guardian*, Saturday March 6, 2004)
- b. When you come to the page called Email Server Names, enter the following: ...  
(*The Guardian*, Thursday June 22, 2000)

こうした例において come が使用されるのは聞き手に「...に行ったら、...しなさい」という指示を与える際には、聞き手の立場に立って聞き手がその到達地点にいるものと仮定するからである。英語によるコミュニケーション能力の育成を目指す観点からは、場面的状況や文脈に応じて適切な英語表現を選択して使用できること、さらにはその表現の使用が適切である理由を理解できることが教師には求められる。単語や熟語や文のレベルを超えて、語用論のレベル、実際の発話場面、使用場面のなかで英語の諸相を教師自身がとらえられることが大切である。

### 3. 文法規則の暗記だけに終始させない指導

中学校や高校では文法を数学の公式のように規則の集まりとして学習者に提示することが多いように思われる。たとえば、人称・数の一致、時制の一致といった文法事項がある。しかしながら、学習段階に応じて Larsen-Freeman (2003)が挙げる次のような例にも学習者の目を向けながら、人称・数、時制は伝達内容によって柔軟に対応することを認識させたい。

- (22) Ten miles is a long way to hike.  
(10 マイルは徒歩旅行には道程が長い。)
- (23) My family are all coming for dinner.  
(私の家族全員が夕食を食べに行きます。)

形式のみに注目すれば、(22)は ten miles という複数主語名詞が単数動詞を従えている例、(23)は my family という単数主語名詞が複数動詞を従えている例である。表面的な形式偏重の規則だけを指導するならば、こうした用例は「例外」「違反」として指導することになってしまおう。ところが実際にはそれぞれの意味が形式に影響を与える文法現象は広く観察される。

- (24) a. Ten miles is a lot better than 50 miles, but not nearly as close as what the council wants: three to five miles.  
(*The Dallas Morning News*, Saturday, January 29, 2005)
- b. While a distance of one half a mile may discourage many from walking, a mere five miles is a trivial distance for even the most casual cyclist.  
(*Independent Weekly*, March 20, 2002)

- c. The District Attorney is right there with us, the police are there with us.  
(*Independent Weekly*, November 26, 2003)

こうした一見すると数の不一致に見える言語現象に対しては、「まとまりが認知される集合体」ならば単数として表現されるという一般性の高い原則が働いている。また、「時制の一致」について Larsen-Freeman (2003)は(25)のような「時制の一致」に当てはまる例と(26)のような「時制の一致」に当てはまらない例を挙げながら、時制の一致のような形式に基づく一般化をとらえる規則は入門期の学習者には、経験に基づく大雑把な規則(rule of thumb)として有効であるが現実の文法を反映していないことを指摘する。

- (25) The man said that the weather was going to be good.  
(26) He said that his name is Paul.

ここでも実際に収集した手元の資料を観察すると、S+said+that 補文内の動詞が(27)のように時制の一致を受けない場合もあれば、(28)のように受ける場合もあることが確認できる。

- (27) a. He said he is confident he would win a referendum.  
(*The Guardian*, Saturday November 30, 2002)  
b. "He said that he is concerned that judges are not thought to be rubber-stamping the executive, that judges are acting in a judicial capacity."  
(*The Guardian*, Wednesday March 9, 2005)  
c. The Czech denied reports that he had threatened to walk out of the team hotel after learning that he was a substitute for last Sunday's Carling Cup final, and said that he is not considering leaving the club.  
(*The Guardian*, Saturday March 5, 2005)
- (28) a. He said his name was Charles. He was eventually picked up by a taxi and dropped off at Liverpool Lime Street station 25 minutes later.  
(*The Guardian*, Saturday August 16, 2003)  
b. He said his name was Abu Omar as-Sayf, and he was a representative of the organisation al-Haramein, which US officials have blacklisted for links to al-Qaida. (*The Guardian*, Wednesday October 23, 2002)  
c. He said his name was Hajdari. The man in the wheelchair was called Hajdari too. (*The Observer*, Sunday October 31, 1999)

こうした時制の一致に関して Larsen-Freeman (2003)は詳しい説明を与えてはいない。Declerck (1991)が説明するように、時制の一致という言語現象は、that 節の状況が相対時制によって主節の基準時と結びつくことによる。That 節の状況が絶対時制により発話時と結びつき、現在でも真の命題として話し手が信じていることを明確にできる。

- (29) a. Bill told me that he has a house in New York.  
 b. Bill told me that he had a house in New York. (Declerck (1991))

Declerck (1991)によれば、(29a)は話し手がビルの話をもとに真に受けている、(29b)は話し手がビルの話が本当かどうかに関して自分の見解を差し控えているといった語用論的含みがある。今や、自然な英語を書く力は話す力と同様にその必要性が高まっている。自然な英語を書き話すためには、英語母語話者の発想や認知の仕方を理解しながら、文法の基礎を固めてゆくことが大切であると考えられる。

#### 4. 日本語と英語の相違に起因する学習者のエラー

日本語と英語が形式と意味において一対一の対応のズレが引き起こすエラーのひとつに前置詞の選択という問題がある。本節では日本語の「で」に対応する英語の前置詞について考察する。日本語の助詞「で」には次のような意味的な側面がある。

- (30) ーで：事物を受けると「にて／によって／により」の意となる。ある物を使用してある行為や状態を成立させる意識の語である。(…)使用の意がより顕著な例は、加工のための手段・方法・道具を表す場合である。 (森田 (1989))

上記のような意味を表す「で」の用例を下記に示すことができるが、日本人英語学習者にとって(31)と(32a-c)の「で」に対応する英語表現を確実に使い分けることができるであろうか。

- (31) 彼女はポケットナイフでカキの殻を開けた。  
 (32) a. 彼はバイオリンでドラムのパートを演奏しようとした。  
 b. その曲はラジオでかかった。  
 c. 彼女は電話で泣いた。

(31)の「で」と(32a-c)の「で」は英語においてはその意味的差異により異なる表現によって表現される。(31)の「で」はナイフが「道具」であることを合図し、“She opened the oyster shell with a pocket knife.”のように with に対応する。(32a-c)の「で」はバイオリンやラジオや電話が「場所」であることを合図し、下記の用例が示すように on に対応する。

- (33) a. The quartet's violinist, Jacqui Carrasco, who also teaches music at Winston-Salem's Wake Forest University, says she learned to dance tango before she learned how to play it on the violin.  
 (Independent Weekly, August 13, 2003)  
 b. "In the past, doing solo acoustic shows, I've felt compelled to fill every single amount of space possible--trying to play drum parts on the guitar while trying to pick out a melody and sing," he says.  
 (Independent Weekly, April 17, 2002)



- c. Sometimes I do it on the computer--I do enjoy fonts--or I use a typewriter. (Independent Weekly, September 8, 2004)
- d. And [when] we looked out the windows at all these people while the music was playing on the radio, you can just see my mother's insides were like, "I'm gonna lose them to this because we're here." (Independent Weekly, July 5, 2000)
- e. You will be able to sell these mushrooms.' And he was so relieved that he actually cried on the phone." (Independent Weekly, July 28, 2004)

このように日本語の助詞「で」が with や on などのさまざまな前置詞に対応するため、日本人英語学習者は不自然な英語表現を使うことが多い。しかし、中右 (1994) のような認知言語学視点からの研究成果を活用すれば、明確に with と on の意味的相違を理解できるであろう。つまり、道具扱いを受けるナイフなどの事物は手にもたれて動かされることで、ある行為や状態の成立にかかわる。ところが、場所扱いを受ける事物はそれ自体が決して動かされることはない。英語母語話者の状況や出来事に対するこうした認知について言及することは学習者の知的な好奇心を高めることにもなる。文法はもはや規則の機械的な暗記ではない。英語母語話者の発想や事象に対する認知の仕方を理解しながら、文法の基礎を固めてゆくことが大切であると考えられる。

## 5. 日英語の発想の相違に関心を向ける指導

「言葉は文化の乗り物、単語は文化の索引である」と言われることがある。文法指導は単に形式や意味の指導にとどまらず、英語という言語の背後にある文化や発想にも学習者の関心を向けることができるような指導を試みたい。日常の挨拶表現“Good morning.”と「おはよう」の発想の相違に気づかせるといったことも英語と日本語の背後にある文化の違いに学習者の関心を高めてくれる。適当な学習段階において、英語の“Good morning.”と日本語の「おはよう」は同じ発想であるかと学習者に問いかけてみることも必要であろう。英語初級学習者には英語がもともとは狩猟、遊牧民族の言語、日本語が農耕民族の言語であるということを感じさせるよい機会になると考えられる。

- (34) a. “Have a good morning.”  
 (「よい朝 (午前中) をすごしてください」(獣に襲われないように／獲物が獲れますように))
- b. 「おはよう」  
 (「お早う」(暑くなる前の早い時刻に農作業をする人をねぎらって))

これらの表現の語用論的側面にも学習者の関心を喚起したい。“Good morning.”は午前中だけではなく、午後に遅く起きた人をからかうような場面でも使われること、「おはよう」は別れ際には用いられないが、“Good morning.”は別れ際にも用いられることにも学習者の注意を向けたい。

また、単語についても日本語訳の暗記にとどまらず、その背後の文化や発想の相違に学習

者の関心を向けたい。たとえば、次例のような英語の *live* と日本語の「住む」の語源を通じて発想の相違について説明できよう。

- (35) a. I live in Boston.  
b. 私はボストンに住んでいます。

英語の *live* の名詞形は *life*、つまり「生命」であること、そして狩猟や遊牧をしながら毎日毎日を「生き抜く」のが英語の *live* の発想であることに気づかせたい。一方、日本語の「住む」の語源についても学習者に考える機会を与えて、同音の「澄む」「済む」という語があることに目を向けたい。濁った水が時間とともに清らかになり落ち着くことを「澄む」というように、その土地を耕し落ち着くことを「住む」ということを理解させることで、日英語の発想に対する学習者の意識を高揚したい。

前置詞の *on* についても「...の上に」と学習者に暗記させるのではなく、表面接触を合図する表現であることを認識させながら、学習段階に応じて適当な用例を提示することが重要である。*on* が「...の上に」という意味だけではないという事実を理解させるために、たとえば“Tom’s new house is on the river.” (トムの新しい家は川沿いにある) の意味を学習者に考えさせることもよいであろう。実際の言語資料を観察すると、ロッジやホテルの宣伝で「川沿い」に位置していることを伝える表現として自然に用いられることがわかる。

- (36) a. The two bedroom house is on the River and sleeps eight with 2 queen size beds, 2 twin beds plus a queen sleeper sofa.  
(アメリカのロッジ宣伝 <http://www.gateway-sequoia.com/rates.html>)  
b. Please note this house is on the river and not in the Sea Forest sub-division.  
(アメリカのロッジ宣伝 <http://www.floridavillaco.com/files/hudson.htm>)  
c. If you have not been to Newcastle before, you should note that this capital city of the North East of England is on the river Tyne, hence Newcastle upon Tyne, in the heart of the Geordie-speaking North East of England. (イギリスの名所案内 [http://www.ncl.ac.uk/ss15/about\\_ncl](http://www.ncl.ac.uk/ss15/about_ncl))

基本的な動詞の特性についても中学校や高校では原理的な指導が求められる。たとえば次のような例を考えよう。

- (37) 「ここから駅までどう行けばいいのですか？」  
a. How can I get to the station from here?  
b. ?How can I go to the station from here?

(37a)のような表現が提示されるときに、「駅に行く」は *go to the station* と習ってきた初級学習者にとってなぜ *get to the station* であるのかという自然な疑問を抱くことであろう。道を尋ねるときには *go to* ではなく *get to* を用いるものだというその場しのぎの説明に英語

教師が終始しては、学習者の言葉に対する関心は薄らいでしまおう。まずは、実際の *get* の使用例を映画やテレビ番組などの会話例から学習者に提示したい。(38)-(39)はいずれも、相手に道案内を請うている例であり、*get to Sesame Street*、*get there* が用いられている。

(38) Kermit The Frog: The question of the day is, "Can you tell me how to get to Sesame Street?"

Grover: Yes, I can answer that question.

(*Sesame Street: 20 and Still Counting* (1989)の台詞)

(39) Hannah Pitt: Well how can I get there?

Homeless Woman: Take the D train. Next block take a right.

Hannah Pitt: Thank you. (*Angels in America* (2003)の台詞)

次いで *get* という動詞の特性を *get to* という組み合わせから離れて、学習者に演繹的に理解させる機会を与えたい。小西 (1985)では、*get* は (何かを) 手に入れるまでの努力のプロセスを含意すると説明されている。動詞 *get* には「苦労や努力をして...を手に入れる」といった意味特性があるため、*get in* という連鎖になった場合にも通常の入りを表す *go in* とは異なり、どこかに入るまでの努力や苦労のプロセスを含意する。実際の言語資料で観察すると、*go in* とは異なり *get in* は話し手が通常に想定できる範囲を超えた「入り方」を問題としていることが確認できる。また、入り方が不自然であるという不信感を表明することになることから、不審者に対して *Who are you?* (お前はだれだ?) という表現と実際には共起する事例も多く確認できる。波線部が示すように、(40a-b)では *Who are you?* と相手を不審に思っている様子がわかるし、(40c)では相手が入室不許可であるにもかかわらず入室した状況で、(40d)では相手が意表をついて施錠済みのドアから(40e)では裏から入ってきた状況で *get in* が用いられている。

(40) a. Milo: I'm home. Fluffy? Here, kitty.

Helga: Milo James Thatch?

Milo: Who, who are you? H-How did you get in here?

Helga: I came down the chimney, ho ho ho.

(*Atlantis: The Lost Empire* (2001)の台詞)

b. Frederic Chopin: How did you get in here? Who are you?

George Sand: I am your slave, and you have summoned me with your music. (*Impromptu* (1991)の台詞)

c. [*Lara enters the containment ward and puts a gun to Gideon's head*]

Lara Anderton: I'd like a word with my husband.

Gideon: You're not authorized. How did you get in here?

(*Minority Report* (2002)の台詞)

d. Janey: Jake! How did you get in here? I thought the door was locked.

Jake: There's a big hole in the side of your house.

(*Not Another Teen Movie* (2001)の台詞)

e. Dale Evans: How did you get in here?

Chick Dillon: The back way. Everyone else is out front taking care of the Sheriff.

(*The Roy Rogers Show* (1951)の台詞)

こうした含意をもつ *get in* を単に *go to* と同義として教えるのではなく、上記のような実例と *get* の基本的意味を重ね合わせて教えることで学習者の英語表現に対する興味や関心を高めることができるであろう。このように同じ状況を知覚しても日本語と英語の母語話者は、発想が異なるために異なる言語形式を選択する。こうした日英語の発想の相違については学習者の自覚が低い場合が多いため、教師は適当な段階で学習者に指導することが大切である。教師自身が日ごろから最近の認知意味論や語用論の研究成果を積極的に吸収しながら指導に反映させることが重要である。

## 6. まとめ

本研究では英文法指導のこれからの在り方についていくつかの事例をもとに検討してきた。学習者の文法意識の高揚は英語学習の強力な動機付けとなる。学習指導要領には「教材は、英語での実践的コミュニケーション能力を十分に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする」と示されている。英語教師は英語母語話者の生き生きとした英語感覚を理解し、言葉はそれを使う人間の心をそのまま映し出す鏡であることを学習者に気づかせる力をあわせもちたい。さらに、英語教師は最近の文法研究の成果を積極的に吸収しながら、言葉の面白さを深いレベルで学習者に教授することが期待される。

## References

- Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman. 1999. *The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course*. Heinle & Heinle
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論』 大修館書店.
- 小西友七編. 1985. 『英語基本動詞辞典』 研究社出版.
- Larsen-Freeman, D. 2003. *Teaching Language: From Grammar to Grammaticing*. (Teaching Methods Series). Heinle & Heinle
- 森田良行. 1989. 『基礎日本語辞典』 角川書店.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』 大修館書店.
- 大竹芳夫. 2000. 「英語教育における非文情報の活用」『信州大学教育学部紀要』 第100号, 37-45.
- Otake, Y. 2001. "Application of Linguistic Knowledge to English Teaching: from the Viewpoint of Recent Semantic and Pragmatic Studies." *JABAET Journal*, Vol. 5, 87-105. The Japan-Britain Association for English Teaching.
- 大竹芳夫. 2004. 「英語力にもいろいろあります」『英語教育』2004年6月号. 28. 大修館書店.
- Swan, M. 1995. *Practical English Grammar*. Second Edition. Oxford University Press.

(2005年9月26日 受理)